

# 研究成果を 評価するための尺度



豊田工業大学  
教授 梅谷 陽二

先日、厳しくはあるがそれだけに的確な評価を下されることで尊敬されている有本卓教授とお会いする機会があった。最近、本当の評価が難しいと痛感するよ、と言われた。また、日本人は評価の訓練をしなければならんよ、とも言われた。こんなことがあって、評価について私なりに考えてみた。

物事を評価するということはまことに難しいものである。難しいけれども、やらねばならない場合がある。そして評価した結果を公開するよう求められるのである。

評価することは評価されることでもある。その評価は正しいか、公平か、常に評価した人の能力が問われる。世間では、正しい公平な評価が誰でも行えるように、評価基準と言うものが設定される。たとえば、学会の論文集の採択基準がそれである。新規性があるか？、論理の欠陥はないか？、有用性があるか？、新しいコンセプトはあるか？、などなどである。

学界の専門性がすでに確定していて、いわゆるパラダイムが存在している場合には、評価基準の設定は可能である。しかし世の中、進歩は急速である。新しいものがつぎつぎと出て、離合集散の激しい時代である。評価方法とか評価基準などは、昨日と今日では異なってくる。それでも評価の実行が求められる。

話を研究開発に限定し、それらの成果を的確に正しく評価する尺度について考えてみたい。言わんとすることは、評価には三つの尺度が必要ではないか、ということである。

第一は、十分に専門的な知識があること。これはもっとも当然な尺度であろう。その専門に関する広くて深い知識の集積が、研究開発の評価にとってもっとも大事である。私たちの周りには幸いにも何人かの博識の大先生がおられて、その先生方の研究成果の良し悪しを見抜く勘とかセンスは脱帽に値する。私などは、1年間にせいぜい20件ほどの論文や成果報告書の評価を依頼されて音を上げているが、大先生のお一人である有本教授は百数十件を越える論文の評価を整然とこなしておられる。

第二は、研究開発の文脈の中で問題の核心を把握する能力があること。つまり、評価すべき研究開発のその時点での環境や周囲状況の中での位置づけが出来ることである。学界の中で、産業界の中で、国際的な視野の中で、その研究開発が持つ意味や意義を認識できる能力と言ってもよい。領域を越えて他の分野まで見渡すことの出来る視界の広さである。

第三は、ビジョンを語る想像力があること。将来どのように変遷するのか、どのような夢が展開できるのか、そして世の中の動きに連動してどの方向へ進展してゆくのか、この種の予測能力であり、洞察力である。

先に述べた第一の尺度が評価基準に相当するとすると、第二の尺度は評価の空間的位置づけ、そして第三の尺度は時間軸の中での評価の変遷を予測することである。つまり評価するということは、これら三つの尺度で構成される計量空間で行うことを意味する。

マイクロマシンの評価はどうなるだろうか。